

「全体主義」と「左派」の歴史認識——Losurdo および Traverso の著作から

“Totalitarianism” and Historical Consciousness of the Left: D. Losurdo and E. Traverso

太田 岳人
Taketo Ohta

1) あるスターリン論——Domenico Losurdo

我々の外部に——これは決まって外部なのだが——大小の「独裁者」たちが存在する。しばしば「病的」「パラノイア的」「怪物的」といった形容を伴った彼らは、途方もない権力を保持し、強制収容所などに象徴される「全体主義的」抑圧を国内に展開し、軍事を含む手段で国外にすら威勢を広げようとする極めて危険な存在、とされている。ところが、我々が素朴にこういった存在に恐れおののいているだけかといえばそうでもない。無慈悲で残忍な存在である彼らは、一方でしばしばその卑小な個人としてのふるまいが強調される存在でもあり、我々はしばしば彼らに憫笑すら与えることができる。我々は、まったく両極端な二つの「独裁者」イメージの間を常に揺れ動いているだけでなく、自覚的にそれらを操作することでそのギャップを楽しんですらいる。しかしその時我々は、「独裁者」の背景や固有の「全体主義」の特質を、本当に歴史的に理解していると言えるだろうか¹。

1941年生まれのイタリアの哲学史家ドメニコ・ロスールド (Domenico Losurdo) の著書『スターリン：ある暗黒伝説の歴史と批判』²は、20世紀に出現した最大の「独裁者」の一人とみなしうるヨシフ・スターリンと、その指導下における「全体主義国家」ソヴィエト連邦を主題にした、全8章の内容およびルチアーノ・カンフォーラ (Luciano Canfora)³ による補足論文を収録した一冊である。ドイツ哲学 (ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーなど) を中心とする研究者として国際的に活動する一方、ある種の「左派」の論客としても著名な彼は、現代においてスターリンおよびソ連が「支配的イデオロギー (ideologia dominante)」によって「悪魔化 (demonizzazione)」されていることについて異を唱え、あらためて歴史におけるその位置づけを問うことの必要性を強調している⁴。

著者はまず序論において、一時期の西欧で多くの知識人 (コジェーヴ、ラスキ、トーマス・マン、トインビー、アーレントら) および政治家 (チャーチル、デ＝ガスペリ、アヴェレル・ハリマンら) が、それぞれの立場から、スターリンの政治活動——生産力の拡大、民族問題の処理、戦争指導など——をそれなりに評価し、時に感服すら示していた多くの事例を取り上げつつ、冷戦の進展にもかかわらず一定程度持続していたこのような評価が完全に消滅するのは、1956年のソ連共産党第20回大会で発せられた「フルシチョフの秘密報告」以降であると指摘する。この文書自体がソ連の権力闘争の産物であり、多大な誇

¹ 日本の場合、こうした現象は特に朝鮮 (朝鮮民主主義人民共和国) の表象に顕著なことがすでに指摘されている。藤本一勇・金杭・鄭榮桓「帝国の負債と「戦後」——天皇制、民主主義、植民地の問題」(『季刊前夜』第1期第10号、40-56頁、2007年)。

² Domenico Losurdo, *Stalin: storia e critica di una leggenda nera*, Roma: Carocci, 2008.

³ イタリアの著名な古代西洋史家の一人であるとともに、トリアッティやグラムシについての研究や、古代から現代に至る「民主主義」理論への批判的考察でも知られている。

⁴ 日本に紹介されている文献としては、ドメニコ・ロスールド『グラムシ 実践の哲学：自由主義から《批判的共産主義》へ』(福田静夫監訳、文理閣、2008年)、ドメニコ・ロスールド「レーニンと支配民族民主主義」(石川耕三訳、『別冊情況』第3期第6巻第8号、298-308頁、2005年) などがある。彼の公式ブログ (<http://domenicolosurdo.blogspot.com/>) では、彼の研究と時論の一部が公開されるとともに、読者への応答もたびたび行われている。なお、Losurdo の日本語表記であるが、本稿は筆者がインターネット上で閲覧できた彼の講演・シンポジウムに現れた発音に近い「ロスールド」で統一する。

張を含んでいるにもかかわらず、そこで描かれている「独裁者」イメージ——アイザック・ドイッチャーの言葉に従えば、「巨大で、陰鬱で、身勝手に、頹廢している、人間の姿をとった怪物」——自体はその後も、冷戦の推進者たちから非スターリン主義を唱える「左派」に至るまでの基調見解となったのである。第1章では、「秘密報告」の重要な論点の一つである、いかに独ソ戦においてスターリンが無能だったかという主張について、軍事史の評価や同時代資料を援用しつつ、防衛力の急速な整備、生産拠点の大胆な後方疎開、諸民族解放のための「大祖国戦争」という大義の設定による内外の支持の獲得といった点を挙げて反駁し、既存のスターリン像を解体する第一歩としている。

それでは、スターリンおよびソ連の活動の背景には何があったか。ロスールドによれば彼らは安定した同盟関係を欠いた状態で、第一次世界大戦から第二次世界大戦へと続く「第二の三十年戦争（*Seconda guerra dei trent'anni*）」を戦う、恒常的な「例外状態（*Stato d'eccezione*）」の中にあっただ。この「第二の三十年戦争」は、二つの世界大戦のような対外的なものばかりではなく、「三つの内戦」を含んでいる。一つ目は、革命直後から1920年代初頭における、西欧諸国の支援を受けた白軍と赤軍の戦争である。二つ目は、干渉戦争後にも予測された新たな衝突に備え、急速な工業化と同時に進められた20年代末からの農業の強制的集団化である。そして三つ目のそれとして挙げられるのは、1930年代後半の「大テロル」へ行きつくことになる、指導部内の「イデオロギー的内戦」である。しかしこうした状況の継続するもとにおいてもなお、巨大な経済力の急速な成長や、近代化に伴う旧来の被抑圧階層および少数民族の社会的向上がもたらされていたことは否定しえず、それゆえスターリンは、しばしば同時代における評価において「イワン雷帝」や「ピョートル大帝」になぞらえられたのだという⁵。

ロスールドは、「独裁者」自身に「例外状態」を解除する意志があったとみなしている。スターリンには「プロレタリア独裁」が「プロレタリア民主主義」ではないことを自覚し、上からの統制の緩和、法治の浸透、形式的でない選挙などの必要性について断続的に言及した形跡が確かにあるものの、その移行を妨げたのは、苛烈な内外の状況を見る彼の「現実主義」であった⁶。この点について、ソ連の「独裁」に対する外的圧力の影響とともに重視されているのは、非所有者にくみする知識人や革命家が陥りがちな「抽象的普遍主義（*universalismo astratto*）」の問題である。十月革命の最初期において、国家機構、家族、市場といった諸制度の廃止や「世界革命」が問題化されるが、こうした発想は抑圧や戦争からの救済を一時にもたらすというメシアニズムに突き動かされている一方、明らかに内外の環境を無視しているという点で「抽象的」なものであった。理想を現実根付かせる過程に必要なのは、普遍的精神を諸課題の解決へと結合するための「学習（*apprendimento*）」のプロセスであるが、これを取りまとめていたレーニンの死後に問題は再燃し、「抽象的普遍主義」の色濃い主張を掲げるボルシェヴィキ幹部（トロツキー、後にブハーリン）らとスターリン派の「現実主義」との抗争は、党を超えて新生社会そのものの解体を招きかねない「内戦」の域に至ったとされる。さらに、現実主義に欠ける救済願望の危険は、革命を準備した民衆のメシアニズムの中にも見いだされる。すなわち第一次世界大戦時に、ロシア軍が敗走を繰り返し支配体制がゆらぐ中で、長きにわたって抑圧されていた農民やそれを母体にしてきた逃亡兵たちは「解放」を獲得し始めるのであるが、そこから彼らは農場や工場の設備の破壊やユダヤ人への猛烈な迫害を開始したのである。無政府主義者の夢であり、マルクスもまた目標としてしばしば言及した「国家の廃絶」は、ある意味ですすでにロシアで起こっていたのであるが、こうした種の「解放」は鎮めないわけにはいかな

⁵ Losurdo, op.cit., pp.13, 16.

⁶ Ibid., pp.127-128, 134-136.

かったし、ボルシェヴィキにはそれが可能だったゆえに権力を奪取できたのである⁷。

このような諸要素を無視した上でのみ、スターリン期のソ連における「悲劇」を、アドルフ・ヒトラー率いるドイツのそれと完全に同質なものとして結びつけ、両者をともに「双子の怪物」として描くことが可能となる。本書の第5章では、独ソ不可侵条約の締結、「ウクライナ・ホロコースト」説（1930年代初頭にウクライナで発生した大飢饉の原因を、特定の民族を狙ったイデオロギー的「テロル」だったとする）、スターリン個人およびソ連の「反ユダヤ主義」説といった、スターリンとヒトラーの平行性の証拠とされる三点についてそれぞれ取り上げ、こうした結びつけの妥当性を検討し、両者の活動や意図の明らかな相違について提示する。特に近年問題視されることの多いスターリンの「反ユダヤ主義」については、ソ連の指導者層におけるユダヤ人比率の高さ、第二次世界大戦後の東ヨーロッパのユダヤ人たち、イスラエル国建設の支援（これがパレスチナ人にとっての「大破局（ナクバ）」を引き起こしたことを含めて）、スターリンの「コスモポリタン」および「シオニスト」観などが絡み合った、問題を取り巻く複雑な状況が描かれる。

しかしロスールドは、スターリンとヒトラーの切り離しによって、後者を単なる「怪物」として片づけてしまっているわけではない。スターリンの非常に苛烈な政策が、常に国内の未発展な状況や敵対的外交関係といった現実的根拠によって動いていたのとは異なり、ヒトラーのユダヤ人絶滅政策や「劣等人種」の奴隷化を図る戦争の展開は、極めて「イデオロギー的」な動機に基づいていたと言えるものの、彼の「イデオロギー」と政策自体は世界史的文脈の中では決して突出したものではなく、これもまた個人の病理に帰することはできないからである⁸。ヒトラーの対置物はスターリン、またはスターリンの対置物はヒトラーしかありえないとする「双子の怪物」という歴史的パースペクティブにおいて決定的なのは、「欠如した第三項（Terzo assente）」への沈黙である。すなわち、西欧における自由主義が歴史的には人種主義および植民地主義と結びついており、ソ連やナチスなどの悪徳や頽廢の証拠として持ちだされる要素のすべては、それ以前の（時には現在の）西欧の活動にも見出すことができるものであることが忘却されている。ソ連の強制労働収容所（Gulag）およびドイツの絶滅または強制収容所（Konzentrationslager）に対し、イギリスの植民地における収奪ないしは強制収容の存在を比較するなど、ロスールドは本書の全編を通じ多くの事例を挙げ、現象的には様々なものが三者に共通しているのみならず、むしろイデオロギー的には自由主義とナチズムの間にごそ連続性が見えることを立証しようとする。文民の殺害、文化の破壊、民族の強制移住といった、さまざまな要素への喚起はほとんど瑣末なレベルにまで至っており、若きスターリンがたずさわった銀行強盗や現金輸送車襲撃といった三面記事の事件にすら、若きチャーチルの失敗に終わった植民地での冒険を対応させている⁹。ともあれ、こうした「比較考証（comparatistica）」を全面的に行うのは、「歴史家はスターリンの様々なイメージの間にある根本的な対立から、もはやそのうちの一つを絶対化するのではなく、それらのすべてを問題にするように進むべきであるからである」¹⁰。

⁷ Ibid., pp.95-99.

⁸ Ibid., pp.176-177.

⁹ Ibid., p.247.

¹⁰ Ibid., p.20.

2) 方法論の問題

本書の著者は、近現代ロシア史の専門家ではないが、伊・独・仏・英語で記された各分野の文献（多くは日本でも翻訳が出版されているような、よく知られたものである）を豊富に用意し、それらの情報を綿密に読み取り、独自に構成することで、通俗的なソ連およびスターリンのイメージへの再認識を図っている。たとえば、悪名高い独ソ不可侵条約に関する記述では、カトリックおよびプロテスタントの教会勢力やイギリス、さらにはシオニストたちやポーランドにいたるまで、後にナチス・ドイツによって攻撃対象となる勢力の多くは、独ソ条約以前に友好ないし不可侵の関係を一度は結んでいたことを想起させ、1930年代は安全保障という面でソ連に非常に厳しい状況が続いていたことを浮かび上がらせる。主題の複雑さによって論述はしばしば前後するものの、紹介されるエピソードの豊富さは魅力的である。第二次世界大戦後に親米政府をイタリアに樹立するデ・ガスペリが、1944年には「ヨシフ・スターリンの天才によって武装された軍隊の、巨大で、歴史的で、世紀の功績」を讃えていたという事実には思わず苦笑させられるし、最晩年のフロイトがファナティックな政治家として「精神分析」を試みたのが、スターリンでもヒトラーでもなくウッドロー・ウィルソンであったという話などには、興味深い印象を与えられる¹¹。こうしたエピソードは、西欧で多くの議論を呼んだ『共産主義黒書』、その寄稿者たちの個別の著作、その他冷戦期の「ソヴィエトロジー」の延長線上にある歴史書などからも掘り起こされている。明白に「反共」的意図に貫かれた文献の中にも、この種の記述の中にすら現れる「犯罪的」「パラノイア的」なスターリン像と対立する要素を随時摘出することで、「実像」の再構築する過程には、この哲学史家の手腕がうかがえる。

しかし、ロスルードの文献学的手法による批判には飛躍も見られる。たとえば彼は、「大テロル」を準備した「イデオロギー的内戦」を語る上で、支配体制への対抗者の政治戦術として社会の動揺を狙った暗殺や攪乱工作が重視されていたロシアの風土、「大テロル」の直前には実際にスターリンを支えていた党幹部キーロフが暗殺（黒幕にスターリン自身がいたという説を、近年における複数の研究成果を引いて否定しつつ）されたこと、またソ連の成立当初にドイツ大使を暗殺したかつての社会革命党員を、トロツキーが保護し秘書として採用していたことなどを次々に挙げ、そこから1930年代後半における政治裁判の告発状に掲げられたような、体制を本格的に転覆するネットワークがありえた——ゆえにそれにも一定の合理的理由があった——とするのだが、ここには明らかに無理が生じている¹²。ロスルードが引用するクルツィオ・マラパルテの『クーデタの技法』には、トロツキーがソ連政府への返り咲きを狙って着々と転覆計画を進めていたという記述があるが、ここからは現実のルポルタージュというよりはむしろ作家の夢想の反映が読み取れる¹³。つまり、ロスルードが批判的なメシアニズムの色合いの極めて強い書物であり、これらから「陰謀」の实在が示唆されるのには納得し難い。また数多い「比較考証」においても、妥当と考えられるものとそうではないものの差がある。自由主義諸国に出現した強制収容所のシステムの一つとして、著者は第二次世界大戦中のアメリカにおける日系市民の強制収容を挙げるのだが、それが人種主義的な政策であったことへの指摘には同意できるとしても、規模や待遇という点では明らかに、この時期のロシアやドイツに存在した収容所と同質の存在とみなすことはできないだろう¹⁴。

¹¹ Ibid., pp.13, 240.

¹² Ibid., pp.69-74.

¹³ Ibid., pp.75-76.

¹⁴ Ibid., p.253. また、日本による真珠湾攻撃について「(そして実際、石油の禁輸措置から日本に残された別の選択肢は非常に乏しかったことにより引き起こされた)」(p.252)としている部分などからは、奇

さらにロスールドは「全体主義」論の批判において、連邦内での民族主義の振興にともない一種の「地方ロビー」の力が中央へも影響していたこと、スタハーノフ運動が高揚する一方で技術者・管理者層に対する労働者層の大規模なサボタージュが起こっていたことについての研究を引用し、「全体主義」の特徴の一つとして挙げられる一枚岩的統制とは外れたスターリン時代を指すためには、「開発独裁 (*dittatura sviluppista*)」というカテゴリーの方がまだしも適切であるとする¹⁵。しかしスターリンの政治体制が「開発独裁」だとすると、それは同時に「社会主義」でもあるのかという疑問が生まれる。チャーチルやフランクリン・ローズヴェルトといった同時代の自由主義政治家による、特に第三世界に対してなされた施策の性格が、スターリンのソ連内におけるそれと劣らぬ熾烈さを持っていたことについて本書で繰り返し言及されることから、かえってスターリンが「共産主義者ではなく、政治家だったのだ」という感想が生まれても不思議ではない。彼は社会主義の看板を掲げていながら自由主義政治家と変わらぬ野蛮な政治をしていたのだから、なお悪いとも言えるようになるのである¹⁶。

3) もう一人の研究者との相違——Enzo Traverso

ロスールドは、スターリン時代のソ連における諸事件の本質を理解するための「比較考証」の必要性について説いているが、ここで彼の論旨の特徴をより理解するために、彼の論述と別の思想史家のそれを「比較考証」してみたい。ロスールドと同じイタリアに生まれ、フランスで活躍するエンツォ・トラヴェルソ (*Enzo Traverso*) の書籍で、日本でも出版された『全体主義』¹⁷は、ロスールドと 180 度対立する見解を有するとともにいくつかの共通する問題意識を同時に含んでおり、非常に興味深い。

『全体主義』は、第一次世界大戦後に生まれたイタリアのファシズム、ドイツのナチズム、そしてソヴィエトのスターリン体制といった、20 世紀になって初めて出現した政治現象について、多くの欧米知識人が「全体主義」という言葉を通じ、これらの体制をいかに考え、またいかに考えてこなかったかについて概説した全 12 章の小著である。

この本で特に強調されているのは、「全体主義」現象の解説と「全体主義」というカテゴリー化が結びついて来なかった、その歴史への批判である。たとえば自由主義者は、少なくとも第二次世界大戦まで、ファシズムやナチズムに自己を社会主義から防衛するものを見出し、同調するか見過ごしてきた。冷戦期には、元共産主義者やそのシンパたちが、かつてのソ連崇拜を裏返しただけの「全体主義」論を披歴した。この両者に否定的であった「反ファシズム知識人」たちもまた、長らくスターリン期ソ連の「全体主義」的な現実をまったく無視し続け、「全体主義」についての議論にも介入しなかった。かくして、冷戦期において「政治生活が反共産主義とスターリニズムとに二極化されていった」のであり、

妙にも日本の保守主義者の弁明を想起させられる。

¹⁵ *Ibid.*, pp.165-170. このような「社会主義」観に関してつけ加えて言えば、ロスールドは自身のブログの文章において、繰り返し現在の中国を非常に高く評価している。彼によれば、中国の「社会主義市場経済」は、絶対的な貧困を解消し多民族が共存するための安定した基盤の確立に不可欠なものであると同時に、強大な資本主義諸国に独立国として対峙するための「現実主義」に基づいた挑戦でもある。これに対し、西側諸国からのダライ・ラマ 14 世への支持や、昨年話題となった劉曉波へのノーベル平和賞授与などは、「人権問題」などを口実にした植民地主義の再来として、頑強に批判されることになる。

¹⁶ たとえば、ブラジルで出版されたポルトガル語版への書評では、実際にそうした意見が出ているようである (<http://domenicolorsordo.blogspot.com/2011/01/sulla-rivista-brasiliana-margem.html>)。

¹⁷ エンツォ・トラヴェルソ『全体主義』(柱本元彦訳、平凡社新書、2010年)。原著は Enzo Traverso, *Totalitarismo*, Milano: Bruno Mondadori, 2002.

議論の多くが空疎なものになったとトラヴェルソは主張する。彼は「反ファシズム知識人」における「スターリニズムの恐怖政治」への「妥協的態度」の典型として、作家アプトン・シンクレアの「醒めた文章」——自由主義諸国に包囲されたソヴィエト連邦が、自国の自由を制限してそれに備えるのは当然であるとする——を引用しているが、これはまさしくロスールドが70年以上も後に展開する論旨と同じである¹⁸。

二人のイタリア人思想史家の違いは、トロツキーとアーレントの扱いの差にも表れている。『全体主義』において、トロツキーとその影響を受けた人物（ドイッチャー、ダニエル・ゲランなど）についての記述の割合は高く、おそらくトロツキー（主義）はトラヴェルソにとって主要な知的基盤の一つである。一方で『スターリン』におけるトロツキーは、「現実主義」の対極にある強烈な「抽象的普遍主義」の持ち主であり、存在自体の隠蔽（スターリンの「神格化」の裏で実際に起こった）こそされないものの、非常に熱狂的な一人の夢想家のように扱われている。アーレントの『全体主義の起原』について、トラヴェルソはそのナチズムとスターリン主義の比較分析を高く評価するとともに、彼女の本が保守主義者に尊ばれる「冷戦の聖書」となったのは「完全な誤解」によるものであり、実質的には「左翼の全体主義論のひとつ」としている¹⁹。対してロスールドにとっての彼女は、1945年の時点においてはソ連の民族政策を評価したことがあるものの、同著によって冷戦期の西側諸国の守護者となってしまった人物である。

トラヴェルソは、ファシズム、ナチズム、スターリン主義のそれぞれが、未曾有の「犯罪」を展開したとしており、これらすべてに断固として批判的である。しかし彼はスターリン主義の起原について、マルクス主義思想あるいはボルシェヴィキの組織そのものに、抜きがたき非民主性ないしは非人間性があるのだという説は支持していない。こういった彼の見方には、スターリン体制の成立に、ロシア帝国から引き継いだ「アジア的後進性」や「上からの近代化」といった要素、つまりは過去の要素が強く影響しているとした、ドイッチャーなどの影響が容易に感じ取れるものであり、ロシアにおける「連続性」についての観点はロスールドにも共通している。また、スターリンの政治体制を、ヒトラーのそれと単純に同一視してはならないと強く主張する点においても、両者は接近する。しかしそこから先の思考／志向が、全く逆の論理構造になっている。トラヴェルソが現代における左派に「スターリン（主義者）の罪を清算できない」問題を見ているのとは逆に、ロスールドは「スターリン（主義者）の功を評価できない」問題を見ていると言えよう。

「全体主義」という言葉の野放図な活用によって、際限なきマイナスイメージを対象に塗りつけてきた歴史から決別することで、より民主的な社会への展望を開こうとする視点や、「近代」の洗練された行政技術の活用といった点で、「全体主義」的政治システムが時代を画しているとするトラヴェルソの主張は、非常に明快である。しかし、「全体主義」の席捲した20世紀批判と同時に、この道具的用語そのものの批判を同時に試みるトラヴェルソにおいて、ナチ／ファシズムやスターリン主義は、もっぱら西欧で展開した「近代」の所産であるが、その一方で彼は「地域戦争、植民地戦争、あるいは民族解放戦争は——中国や朝鮮からヴェトナムまで——ほとんど二つのイデオロギー・ブロックの戦いの内に吸収されるだろう」としている²⁰。このような「第三世界」観は、ロスールドのスターリンに対する見解と同程度に「醒めた見方」ではないだろうか。確かにアジアを顧みれば、第二次世界大戦後に中国、朝鮮、ヴェトナムなどで政権を奪取したのは、多かれ少なかれ「スターリン主義者」である。するとトラヴェルソにとって、この時期の「反植民地主義」の

¹⁸ 前掲書、84頁。

¹⁹ 前掲書、114–115頁。

²⁰ 前掲書、16頁。

活動そのものが「スターリン主義」の変名に過ぎず、彼のような「左派」にとって関心をひかないものとなるのであろうか。

『全体主義』終章の「スターリンや毛沢東やポル・ポトの犯罪に決着をつけることができない共産主義は、いかにしても受け入れられないだろう」²¹といった発言からは、ロスールドとは明らかに異なる種の「左派」——「反スターリン主義」の——としての、彼の問題意識を読み取ることも可能であろう。しかしここで、それぞれの諸体制は、「スターリン主義」という単なる「犯罪」のカテゴリーに収められてしまっている。これとは逆にロスールドは、自著の終章において「毛沢東やポル・ポトの犯罪」もまた、スターリンと同じように歴史的に文脈化されていないと考える。すなわち中国が、毛沢東が政権を奪取した時には世界の最貧国だったこと（1820年の時点では、世界全体のGNPの32%を占めていたという試算を引用しつつ）、またカンボジアが、ポル・ポトの恐怖政治以前にも、アメリカによって行われた猛烈な爆撃作戦などによって膨大な死者を出していたことに着目し、このような状況もまた彼らの「犯罪」に影響していなかったのかと問いかけている²²。

トラヴェルソは、帝国主義や植民地主義がナチスを誕生させた実験室として言及されたことをもって、アーレントの著作を評価しているが、高橋哲哉によるアーレントへの考察に従えば、彼女の記述それ自体には植民地主義への批判というよりは、しばしばその肯定すら見て取れる²³。もちろん、反スターリン主義者の中に反植民地主義者は存在しないなどとは言えない。トラヴェルソが『全体主義』の中で言及している知識人の中では、シュルレアリスム運動の指導者アンドレ・ブルトンを挙げることができるだろう。彼の反植民地主義は、早い時期からのナチズムとスターリン主義の両者に対する拒否と同時期に現れており、それは1930年代の「反植民地主義博覧会」の組織から、晩年の「アルジェリア人の解放闘争」を支持した発言にまで続いている²⁴。『全体主義』ではこの二人はともに、反ファシズムと反スターリン主義の両方の要件を満たした人物として評価されている。しかし、このような評価は20世紀史における一つの大きな問題が見落とされている結果からなされている感がある。

4) おわりに

2008年末に出版された『スターリン』の書評が『リベラツィオーネ』（「共産主義再建党」の機関紙）に掲載されたのは、翌年の4月のことである。評者は、ロスールドの「全体主義」や「抽象的普遍主義」の批判には同意しつつも、総体としてはスターリン時代の実態をあまりにも軽視していると結論づけていた。しかしその翌日には早くも、同紙の「編集部の一グループ」によって、著者も評者もスターリンを擁護しており許されないとする激烈な抗議のアピールが掲載されたのである。この話題は『マニフェスト』（新左翼系の独立紙）にもおよんだ。ロスールドの支持者たちは『リベラツィオーネ』に彼を擁護する共同声明を提出したものの、掲載されなかった²⁵。ある歴史学雑誌の記事は、『スターリン』の

²¹ 前掲書、190頁。

²² Losurdo, *op.cit.*, pp.285-294.

²³ 高橋哲哉『記憶のエチカ』第2章、79-118頁（岩波書店、1995年）。

²⁴ トラヴェルソ『全体主義』、83、86、91頁。なおブルトンとトロツキーの関係、および前者の政治的マニフェストについては以下を参照。Arturo Schwarz, *Breton e Trotsky: storia di un'amicizia*, Roma: Massari, 1997.

²⁵ Guido Liguori, *Il Socialismo alla Prava del Gulag: Tanti drammi per un simile risultato?*, 《Liberazione》, 10 aprile 2009; Checchino Antonini e altri, *Si vuole riabilitazione Stalin? Non ci stiamo*, *ibid.*, 11 aprile 2009 をはじめとして、4月中旬から下旬にかけての両紙を参照。ロスールドは自身のブログに「スターリン論争」に関

資料操作に存在する難点を批判的に取り上げつつ、この本をめぐって短期間のうちに応酬が起こったことについて、スターリンとソ連の問題がそのまま「左派」における文化および政治上のアイデンティティの問題と結びついているためと指摘している²⁶。

それでは彼は、絶滅収容所に代表されるナチスの「犯罪」の存在そのものを虚偽だと強弁する、いわゆる「左派」——彼のスターリンの評価に賛同するのは、明らかに少数派であるが——における「歴史修正主義者」なのであろうか。彼は、ソ連のたび重なる政治的転換の中でいくたびも猛烈な事態が発生し、多くの人命が失われたことを認めているので「否定論」には立っていないが、その歴史的事実の解釈のあり方には「弁護論（正統化論）」的要素があると言える。スターリンは「怪物」ではなく、その「犯罪」あるいは失政が単なる「不可思議なる邪悪（mysterium iniquitatis）」の堆積ではなく、歴史的状況に位置づけて「理解しうる」ものであることをロスールドは着実に示した。しかしこのことによって、それらがそのまま「受容しうる」ようになるわけではない。政治責任やモラル上の巨大な問題は残っているのであり、それゆえスターリンらを「いかにしても受け入れられない」というトラヴェルソの拒絶は、当然重く見られなければならない。しかしながら、ロスールドの「欠如した第三項」を徹底して引き出した上での「比較考証」自体は認められうる。彼の論証は精度および指向性に一定の問題を抱えているとはいえ、決して「双子の怪物」による歴史的諸惨事の相対化の域にとどまってははいないからである。つまり自由主義諸国の歴史への度重なる参照は、「独裁者」ないしは「全体主義国家」という他者を分析する前提として、自分たちがいかなる過程を経て今に至っているのか、彼らが今に至る過程に自分たちがどうかかわって来たのかという、自分の属するものへの問い直しが確かに含まれており、こうした確認はあらゆる歴史認識、また現在への認識に欠かせない要素である。

ソヴィエト連邦の解体が進行しつつある 1991 年 10 月という時期に、反植民地主義運動にたずさわっていたあるアメリカ在住の知識人は、インタビューでこう答えた。

僕らの運動は、いまや世界にひとつしか残っていない超大国が、敵側のパトロンとなっているような状況で闘い続けている、最初で、おそらく最後の解放運動であるということです。したがって、僕たちには戦略的な同盟を結ぶ相手がいません。〔中略〕ショッキングな事実ですが、第二次世界大戦後の解放運動でソヴィエト連邦の存在なしに成功したものはないので。僕らはソ連なしでやっていかなくてもなりません。これまでも、さほど援助を受けたわけではありませんが、それはもはや存在さえしないのです²⁷。

エドワード・サイードは、自分と同じ故郷喪失者としてアメリカに生きたアーレントを愛し、「西欧マルクス主義」としてのルカーチやグラムシを吸収していた。彼はソ連へのシンパシーとはまったく縁遠い存在のはずであり、その本来の志向はトラヴェルソによほど近いだろう。しかしそのサイードは、実際にソ連が消滅する際に、あたかもロスールドの主張に合わせたかのように、彼らがパレスチナの解放運動に一定の意味を占めていたこと

する発言集 (<http://domenicolosurdopolemicastalin.blogspot.com/>) を用意しているものの、リンクの多くは現在のところ機能していない（ブログ側の意図ではなく、サーヴィス会社の問題であると但し書きがある）。ちなみに、擁護声明 (<http://domenicolosurdo.blogspot.com/2009/04/la-lettera-in-sostegno-di-domenico.html>) には、国際的にも著名な哲学者ジャンニ・ヴァッティモ（Gianni Vattimo）も加わっている。

²⁶ Franco Milanese, *La "Leggenda Nera" dello Stalinismo: intorno a un dibattito storiografico e ad alcune rese dei conti*, 《Historia Magistra》, n.2, 2009, pp.23-34. この論文の後半では、2008 年の選挙で国会議席をすべて失った再建党における、内情の問題にも触れられている。

²⁷ エドワード・サイード、デーヴィッド・バーサミアン『ペンと剣』（中野真紀子訳、ちくま学芸文庫、2005 年）78 頁。

※本稿の注釈に挙げたブログ記事は、すべて 2011 年 1 月 30 日の時点で確認されたものである。

を認め、事態についての憂慮を吐露せざるをえなかった。実際、その後のパレスチナの状況の推移と晩年の彼の苦悩は、日本でもよく知られているところである。ヒューマニストとして名高い彼が、ソ連の退場を惜しんでいたのは「ショッキングな事実」であろうか？ そうではない。おそらく、サイドにこの瞬間あらわれたパラドックスは、20世紀に発生した様々な解放運動に参加した人々の中にも現出した種のものであり、そうした運動の歴史的立場づけを考える上で重要なものであろう。相手を「独裁者」または「全体主義」として自分で戯画化し、「いかにしても受け入れられない」と拒絶する前に必要なのは、自らの歴史的立ち位置そのものへの問いなのである。